医歯薬学研究部だより

徳島大学大学院 医歯薬学研究部
Tokushima University
Graduate School of Biomedical Sciences

Vol.9
2019年4月1日

1 巻頭言
大学院医歯薬学研究部長 苛原 稔

2 副研究部長就任挨拶
医科学教育部長 赤池 雅史
口腔科学教育部長 宮本 洋二
薬科学教育部長 佐野 茂樹
栄養生命科学教育部長 酒井 徹
保健科学教育部長 安井 敏之

4 寄附講座
『地域リウマチ・総合内科学分野』紹介
地域リウマチ・総合内科学分野 特任教授(併任) 西岡 安彦
『地域呼吸器・総合内科学分野』紹介
地域呼吸器・総合内科学分野 特任教授 篠原 勉

5 旬の研究紹介
医療情報・生命科学・創薬科学に関するビッグデータを活用したドラッグリポジショニング研究
臨床薬理学分野 准教授 座間味 義人

6 旬の研究紹介
アミノ酸をキーワードとした栄養学のトランスレーショナルリサーチ
代謝栄養学分野 講師 堤 理恵

7 医療教育開発センターニュース

8 総合研究支援センターニュース

9 AWAサポートセンターニュース
徳島大学AWAサポートセンター長 葉久 真理

10 「蔵本地区国際交流の夕べ」開催報告
医学部 国際コーディネーター 村澤 普恵

11 学会情報
退職教授等一覧

12 学会賞等受賞者紹介
編集後記

巻頭言

新しい時代の研究部をめざして

大学院医歯薬学研究部長 苛原 稔

この研究部だよりが読まれる頃には新しい元号が決まり、新しい時代の幕開けが感じられていると思います。平成30年間の分析はこれから多くの場所で進むと思いますが、何はともあれ、新しい時代が希望に満ちた時代でありますように祈念したいと思います。

さて、徳島大学においては教育・研究・教員の分離の方針に従い、2019年 4 月から医歯薬学研究部長が専任となり、今までに引き続いて医歯薬学研究部長を拝命することになりました。改めて重責遂行の意を強くしております。今後ともご支援をお願いしたいと思います。

国立大学の法人化に伴い、運営交付金の減少と競争的資金の増加により、国立大学は大きな曲がり角にあります。すなわち、勝ち組と負け組が明確になっていくことになります。医歯薬学研究部は、徳島大学のエンジンとしての働きをしてきましたが、これからもエンジンであり続けるためには、将来を考えた変革をしていかねばなりません。今、医歯薬学に問われていることは、将来のビジョンを明確にして活性化を図ることだと思います。そこで、これからの医歯薬学研究部のいくつかの課題について報告したおきたいと思います。

まず、医歯薬学研究部に医学域、歯学域、薬学域、保健学域の4研究域があります。そして、教育・研究に従事する教員を抱えています。大学のような教育機関の最大の財産は教員そのものです。教員のレベルが大学のレベルであり、教員の在り方、すなわち組織構造が大学の力となります。その意味から、教員選考は重要であり、教員選考を通して組織改革を進めて行く必要があります。幸いにも医療系の 4 研究域を抱えていますので、共通する科目もあり、共同して教育できる環境があります。その利点を利用し、果敢な組織の再構築を考える時期になっています。

つぎに財務については、国からの運営費交付金が毎年減少して行く中で、如何に教育・研究費を確保して行くかが大きな課題です。従来は各学部に配分されていた運営費は、これからはまとめて医歯薬学研究部に配分されることになりました。もちろん、教育に使う費用は今までと同じようにかかりますので、それを確保して行く必要がありますが、この運営費を蔵本キャンパス全体の活性化のために適切に使う工夫が必要です。研究域長（学部長と保健学科長）の意見を十分聞いて、価値ある費用の使い方を考えたいと思います。

また、蔵本キャンパスには多くの建物が林立しています。そして、それぞれの建てられた用途や時代は様々です。医学部棟や薬学部棟の改修はすでに終了し、病院の再開発もほぼ完成し、あとは歯学部棟の改修が年次推移で進む予定です。しかし、最近の教育の多様化や研究活動の活発化、大学収入の増加策などで、建物の有効利用が期待されます。そのため、研究部内に有効利用を促進する委員会を作りたいと考えています。

さらに、これからの少子化による18歳人口の減少を睨んで、大学使命の在り方も考える必要があります。学部教育と大学院教育の連続化、学部を越えた連携、そして社会人の再教育への取り組みなど、社会に根差した教育の使命の再定義が必要です。これは一朝一夕にできるわけではありませんので、今から準備を進めたいと思います。

2019年は国立大学中期計画第 3 期の半ばを迎えました。国立大学法人の在り方が変わり、一法人で数大学を保有できることになります。大学同士の連携や合併も話題に上がっています。これからの 3 年間は、国立大学にとってとても重要な 3 年間になると思います。それを肝に銘じ、研究部長を務めたいと思います。

副研究部長就任挨拶

副研究部長【医科学教育部長】　赤池　雅史

このたび、医歯薬学研究部副研究部長ならびに医科学教育部長を担当させていただくことになりました。教員組織である医歯薬学研究部は、学部･教育部と連携しながら、医療系の研究と教育の充実をはかる使命があり、苛原研究部長のもと、その発展に力を尽くしていく所存です。

医学域医科学部門では、研究クラスターを拠点として、他学域や先端酵素学研究所との連携のみならず、社会産業理工学研究部との医工連携による学際的研究をさらに推進していきたいと思います。医科学教育部では、Tokushima Bioscience Retreat や教育クラスターによる組織横断的大学院教育を進めるとともに、教育プログラムの評価と改善をはかることで、新専門医制度の影響による大学院離れに対応していく必要があります。学部教育については、医学教育分野別評価に基づく教育の質保証に取り組むとともに、専門職連教育や医光融合プロフェッショナル人材育成等、徳島大学の研究の強みを生かした特徴のある教育プログラムの構築を目指したいと思います。

皆様のご指導、ご支援のほど、よろしくお願いいたします。

副研究部長【口腔科学教育部長】　宮本　洋二

平成 31 年 4 月から医歯薬学研究部副研究部長ならびに口腔科学教育部長を担当させていただくことになりました。

医歯薬学研究部歯学域は、歯科医学の世界最先端の研究を目指しています。医学・生物学の研究が中心ではありますが、医学部や薬学部とは少し違って、生体材料や機器に関する研究もあります。実際には、高齢者の口腔ケア用の機器や歯科用インプラント、骨を造成するための人工骨の開発、さらには MRI 検査において金属アーチファクトを生じない医療用合金や LED による低疲労照明機器、ワイヤレス給電式医療機器の開発なども行われています。これらの研究には幅広い分野の連携が何よりも重要です。医歯薬学研究部の皆様のご支援と、さらには徳島大学全体のご協力をお願い申し上げます。

そして歯学部の喫緊の課題は校舎の改修です。私は歯学部の 1期生ですが、私が大学2年生の時に建てられた 40 年前の建物です。改修は5期計画で、 3期までは何とか見通しが立ちつつあります。 4期以降は全く未定ですが、蔵本地区の発展に寄与できるよう、皆様と共に検討させていただきたいと思います。

医歯薬学研究部、徳島大学のさらなる発展のために、力の限り努力する所存ですので、ご指導の程、お願い申し上げます。

副研究部長【薬科学教育部長】　佐野　茂樹

平成29年 4 月に医歯薬学研究部副研究部長ならびに薬科学教育部長を拝命してから 2 年が経過し、平成31年 4 月からは 2 期目を務めさせていただくこととなりました。

徳島大学薬学部では、薬学が関係する諸分野の連携を基盤に自らの活躍の場を積極的に開拓できる能力に溢れた人材を「インタラクティブ YAKUGAKUJIN」と名付け、他大学にはない独自の講義や演習を導入することにより、多様な薬学関連領域にあって次世代を担う人材の育成に教職員が結束して取組んでいます。創薬科学専攻（博士前期･後期課程）と薬学専攻（博士課程）の 2 専攻からなる薬科学教育部におきましても、蔵本地区の各教育部の諸先生方との広範かつ密接な連携のもと、各専攻ごとに「くすり」の研究を基盤とした学部からの一貫した特色ある教育プログラムを構築し、広い視野と国際性を備えた創薬・製薬研究者ならびに高度な職能を有する指導的薬剤師、医療薬学研究者の育成をめざします。

第 3 期中期目標期間も後半に差し掛かる中、医歯薬学研究部のさらなる発展のため、これまで以上に粉骨砕身努力いたす所存ですので、皆様方には今後ともなお一層のご支援、ご協力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。

副研究部長【栄養生命科学教育部長】　酒井　徹

平成31年４月より医歯薬学研究部副研究部長・栄養生命科学教育部長を拝命しました。栄養学科は平成26年に改組し、医科栄養学科となりました。その改革の一つに臨床系の新分野（疾患治療栄養学分野）を設立し、病院栄養部と共同で臨床栄養の教育をより発展させる体制を構築したことがあります。大学院改革も、医科栄養学科第１期生が卒業する平成30年度にあわせて行いました。現在は、栄養学に関わる基礎的な研究より人を対象とした臨床研究を通じた教育体制が医療系３学部５教育部の基に整備されています。徳島大学(大学院）栄養学科（あえてこのように書きますが）の強みは進学者が多く、人口密度が高い環境下で研究活動を通じた教育が行われている点です。スポーツの世界で例えるなら、一流のアスリートを育成する養成施設で鍛えられているイメージです。全体の栄養学研究レベルが高いので、本人は意識しなくても大学院に在籍し通常の研究生活を送っていればかなりの水準の研究能力が身についているでしょう。このことは大学院を修了した卒業生の社会での活躍をみれば分かると思います。現在の、日本の大学は厳しい競争原理、経費削減の圧力にさらされていますが、大学院生や若手研究者が活躍できる環境を提供し、研究活動を活性化することが唯一の打開策と考えています。

医歯薬学研究部のこれからの発展につながるように一生懸命頑張る所存ですので、ご指導・ご助言の程よろしくお願い申し上げます。

副研究部長【保健科学教育部長】　安井　敏之

平成 31 年 4 月1日から医歯薬学研究部副研究部長（保健科学教育部長）を担当させていただくことになりました。

保健科学教育部には、生涯健康支援学領域、医用情報科学領域、医用検査学領域の3領域があります。平成 18 年に修士課程、平成 20 年に博士後期課程が設置されてから多くの教育者、研究者、高度医療専門識者を育て、送り出してきました。また、社会に貢献できる多くの研究成果も報告してきました。生命科学や医療技術は飛躍的に発展し、健康への関心は高まり、医療への期待も大きくなっています。その一方で生命倫理や医療安全なども求められるようになってきています。そのため、様々な領域の考えを柔軟に取り入れることが必要となってきており、他の教育部との積極的な連携が必要です。現在、大学を取り巻く環境は大きく変化しようとしていますが、大学院生や若手研究者が積極的に交流し、共同で研究を行うことができ、その実力を充分発揮できるような環境を提供できるように努めていきたいと思います。医歯薬学研究部のこれからの発展に繋がるように一生懸命頑張る所存ですので、何卒御支援、御指導いただきますようお願い申し上げます。